

福岡女学院大学大学院人文科学研究科発達教育学講演会 国際交流講演会

子どもの虐待と脳科学

—アタッチメント（愛着）の視点から—

友田 明美

「福岡女学院大学大学院紀要 発達教育学」第7号

2019年3月

福岡女学院大学大学院人文科学研究科発達教育学講演会 国際交流講演会

子どもの虐待と脳科学

—アタッチメント（愛着）の視点から—

2018年9月24日（月・祝）福岡女学院大学ギール記念講堂

講師：友田明美（福井大学 子どものこころ発達研究センター教授）

それでは、ただいまの内田伸子先生に続きまして、私、福井大学から参りました友田でございます。本日はよろしくお願いたします。

子どもの虐待と脳科学に関する診療と教育を一貫してやってまいりました。言うなれば、30年ぐらい経ちますが、子どもの発達、育ちに関する仕事をやってまいりました。今日は、先ほど内田先生も言っておられたアタッチメント（愛着）の視点がいかに大事かお話をさせていただきます。

先進国では、少子化が再び進んでいます。安倍政権三期目になり、一つの家庭にできれば子どもさんが2人、できれば3人と1.8人を目標に言っておりますがなかなか伸びません。リーマンショックが10年ぐらい続きまして、フランスもなんとかもちました。アメリカ、フランス、ドイツもそうですがなかなか少子化に歯止めがかかりません。言うなればもうこの日本の社会は、超がつくほど「超少子高齢化」と言ってさしつかえがありません。33世紀の日本には子どもがたった3人しかいなくなるという資産が出ています。考えられないでしょうけれど、このようなスピードで下がってきています。その中で、マルトリートメントがあとをたたないという現実が浮かびあがってきました。

この会場にいらっしゃるみなさま、マルトリートメントをご存知の方、知らなかった方、今日来られた甲斐がございました。この「マルトリートメント」というカタカナは何だろうと思われたのではないのでしょうか。実は日本語で「子どもと不適切な関わり」を意味します。ヘアトリートメント、ヘアシャンプーをしたあとに髪の毛がパサパサならないように使いますがそれはいい扱いです。しかし、この「トリートメント」に「マル」がつくと、「悪い扱い」「不適切な扱い」となります。このマルトリートメントというのはWHOにも定義されています。医療者や関係者は、「マルトリートメント」は「虐待」「ネグレクト」と同義と感じております。しかし、今日私が強く申したいのは、この虐待とは言い切れないけれど大人から子どもに対するこの不適切な関わりについてです。これをすべて包括して「マルトリートメント」と考えましょう。なぜかと言うと、今の時代は虐待を犯

罪扱いで終わる時代ではありません。「マルトリートメント」は、子育て困難な家庭のSOSと考えましょう。

公的空間、私的空間、ここの隔たりがあまりにもあります。この「マルトリートメント」という単語の定義を使って、早い時期に先ほどのように、FとMのような子どもさんが出てこないようにすることが、このマルトリートメントを広めていく1つの大きな理由になります。WHOのホームページには、大人の4分の1が子ども時代に身体的虐待を受けています。この中には、激しい体罰も入っています。そして、女性の5人に1人、また男性の13人に1人は子ども時代に性的被害である性虐待を受けています。生涯に渡りこのマルトリートメントを受けると身体、精神の健康を損ないます。また、国の経済発展、社会成長まで遅れてくるというような現実も分かっています。残念ですが、マルトリートメントは過去最多でございます。なぜ、子どもと不適切な関わりであるマルトリートメントがあとをたたないのでしょうか。今日はみなさまと考えていきたいと思えます。

先月8月の終わりに厚労省から統計が出されています。2017年までに13万件を超えました。これは対応した件数です。虐待死は減っていますが、1週間に1人いることになります。目黒の事件で有名になりましたが、結愛ちゃんのようなお子さんが亡くなっています。他人（ひと）ごとではございません。1週間に一人の子どもの命、かけがえのない宝物の命が亡くなっています。しかし、それ以外にも先ほどからもFとMのお子さんもそうですが、児童虐待、相談の件数が90年代からずっと右肩上がりになっています。少子化の時代、宝物である子どもが、なぜこのようにしてマルトリートメントを受けてしまうのでしょうか。5割が実の母親で、3割が実の父親です。これは、なぜ母親がマルトリートメントをするかということが文字通り考えさせられる数字です。どの年もほとんどこのパーセンテージです。それは、主な養育者が母親だからです。そして、1回では終わらず、児童相談所が介入します。このようなマルトリートメントを繰り返さないでください。これは「不適切な養育」と言って大変なことになります。体や心にも後遺症が出てきます。親は反省しますが、家庭に戻すとまた同じよう

にマルトリートメントをします。あとをたたずに繰り返してしまうので、どんどん増えていきます。

また、昔よくあった「鍵っ子」もマルトリートメントです。両親が共働きで鍵を子どもに持たせて一人で留守番させていました。これはアメリカの場合、多くの州で法律によって罰せられます。場合によっては親が逮捕されます。そのため、アメリカでは12歳以下の子どもがいる家庭は、どんなにお金がないところでもベビーシッター料を払い、代わりに見守る大人もしくはそれに代わるベビーシッターが子どもを見守ります。そして、親が勉強会に行ったり、講演会に行ったりパーティーに行ったりします。つまり、これは1つのマルトリートメントです。あとでどのような影響が出るかをご紹介します。

さらに、小さいお子さんの前ではなくて、年頃、思春期、青年期に向けたお子さんの前で、お父さんお母さんが下着1枚でうろろろすることは、性的マルトリートメントになります。また、例えば、子どもが嫌がるのに一緒にお風呂に入りたがろうとすることです。もちろん2、3歳ぐらいまでなら全然問題ありません。しかし、少しずつ年頃になってきて、お父さんが娘とお風呂に入ることは、アメリカでは場合によっては罰せられます。3歳の子とも10歳の子ともでは同じ風景でも見る理解の仕方、考え方、感じ方が違います。当然子どもだから入ると思うことは違います。12歳、13歳を過ぎると、女兒は、おやじ臭がするからと父親と同じ洗濯機で衣類を洗って欲しくないと言い出します。このように、少しずつ歳と共に、発達と共に子どもは感じ方が違います。近所の方にもぜひ、語り部となっただきたいと思います。

さて、ここから少し深刻な話をします。この小さい時期のマルトリートメントが、どうやら健康や寿命に及ぼす影響が分かっています。これは1990年代に、のべ1万7千人くらいの人を対象とした大規模な追跡調査研究です。フェイリティ先生が指揮をとられて、小さい時期にマルトリートメントを受けるとどのような影響が出てくるか調査を行いました。ネグレクトや様々な虐待を含めたマルトリートメントについてです。心の傷やトラウマができ、さっきのこのように神経発達の混乱が早い時期に出てくるのです。

これは、ピラミッドです。段々この神経発達の混乱が次に出てくる社会的な障害となります。対人関係、人に近寄らない、それから場合によっては暴力をふるいます。動物虐待も含め、そのような社会的な障害、人と人との関わりができないことや情緒的な障害、大人になっても、不安や鬱がずっと付きまといまいます。そして、自殺を繰り返します。自分は生まれてこなければよかったとずっと繰り返すのです。そして、認知の障害です。これは文字通り先ほど内田先生がおっしゃっていたIQ知能指数です。知能指数が環境を改善してもなかなか伸びにくくなるということが分かっています。

これだけでは終わりません。健康を害する行動の異常です。薬物や使ってはいけないアルコール、薬物汚染、薬物依存、覚醒剤、それから大麻です。こういった使ってはいけない薬物に手を出してしまいます。そして、その薬の効果が効いている時は気分がよくなりますが、効果が切れます。そうすると、また犯罪を犯してでも手に入れようとするのが薬物汚染です。それから心の病気で、そういった問題がどんどん出てきます。そして、そのような人たちは、小さい時期にマルトリートメントを受けているのです。

虐待サバイバーとも言いますが、心の病気だけではなく様々な病気、身体の病気、がん、高血圧それから糖尿病。場合によっては長生きできない、社会に適應できない、そして生活保護を申請するようになります。恐ろしいのは早死です。心臓疾患や肺がんにかかるリスクが生涯3倍にも高まり80代まで生きられる人生が6代になります。なんと20年も寿命が縮まるという現実も分かっています。

では、ここに集まっておられる方は、このような事実を知って、何かご自分の立場で子育て、それから様々なご家庭の支援や教育に関わろうとしておられる、関わっておられる、私はここが大事だと思います。予防です。そして私たちのような研究者が、この科学的相違に関するエビデンスを見つけ、介入していく、ここにつきると思います。

おそらく2年前に、タイチャー先生がこの辺は詳しくお話になったと思います。うつ病、アルコールや薬物依存、PTSD、これは心的外傷後ストレス障害と言います。西日本の豪雨、それから去年、福岡でありました九州北部の集中豪雨や東北の震災、そして阪神・神戸の震災です。そのような震災でも恐ろしい記憶が蘇ります。これがPTSDです。マルトリートメントを受けた経験が急に蘇る、10年も20年も経った後、急に恐ろしい現場がまざまざとフラッシュバックとして蘇ります。これもまたPTSDです。

それから、統合失調症です。精神疾患、心の病気の中で大変難治性と言われていています。しかし、この病気の発病には、小さい時期のマルトリートメント体験が非常に大きく関わっておりリスクが高くなります。つまり、家庭的、遺伝的な負荷があっても、統合失調症は小さい時期のマルトリートメント体験があると、発病しやすくなるのがこの10年、世界各国でメタ解析されています。もちろん、日本国内からも出ました。ヨーロッパやアメリカに、次々に出ました。そして、様々な人格障害を招きます。境界性人格障害（ボーダーライン）、それから、自己愛（ナルシスト）です。また、忘れてならないのは乖離です。意識や記憶が飛んでしまうのです。

例えば、3ヶ月前、防犯カメラに小学校4年生の男の子が万引きしているところが映りました。その子の診療を私が担当しました。「この防犯カメラに映っているのは

あなたかな」と聞きました。「ぼく覚えてない」とその子は言います。顔、形はもう彼です。意識や記憶が飛んで別の人格になるのです。これを乖離と言います。乖離性人格障害です。これは二重人格、三重人格、多重人格となってしまう、このような心の問題になっていくのです。しかし、巧妙がございまして、実はこのマルトリートメントを、この世の中からなくすことによって成長の心のトラブルが減ってくるのが分かってきました。

うつ病の54%が、このマルトリートメントを無くすと減ります。それから、依存症です。先ほどの薬物汚染は65%なくなります。薬物乱用は薬物に手を染めることです。最初は薬物に手を染める、これを乱用と言いましたが、薬物乱用、これも50倍、自殺を繰り返すことは60倍、静脈注射の薬物乱用は8倍近くになっております。ひいては、私たち国民の税金で成り立っている医療費の削減にもつながることが分かっています。私たちは、これから少子化社会の中で考えていかなければならないのです。このマルトリートメントを減らす取り組み、これを社会や私たち教育関係者がもっと積極的にやっていかなければなりません。

そこで、私の専門でございます、子どもの発達に関する脳科学をここでご説明しようと思えます。内田先生もお話しされていますが、小さい時からずっと成長していく脳の成熟です。実は、今の脳科学で分かってきたのは、この子ども時代がとても大事だということです。1歳の時には何割の脳が育つか、4歳の時は何割か。言うなれば、トマトです。青い小さな実がどんどん太陽の光と栄養と水でどんどん成熟して真っ赤な完熟したトマトになります。最終的に脳が育つには成熟のプロセスがあるのです。それはなんと、20代の終わりということが分かっています。そうしますと、10代、20代に危ないことをいっぱいします。20代の方はまだいっぱい失敗や過ちを繰り返してもおかしくありません。10代に家出をしたり教師に暴力をふるったり、友だちと取っ組み合いの喧嘩をしたり、色々な過ちをします。衝動性があるのです。しかし、その中で反省、更生します。神経回路の修復が可能なのです。もちろん、30歳を過ぎても時間はかかりますが可能です。これにより、95%まで育つ黄金期のこの時期は特に大事です。このような時期にマルトリートメント、いわゆる虐待を受けるストレスを受けますとどうなるかを、私たちは研究で調べてまいりました。

先ほど、内田先生がご紹介された、アーモンドの形。この脳の奥深くにあるまさにアーモンドの形を「扁桃体」をいいます。これは、感情の中心と言われていています。ここが先ほどのように、ネグレクトや様々なタイプのマルトリートメントをずっと受けると暴走します。みなさんには腎臓が背中側に2つ付いています。そこの上の副腎という所から、ストレスホルモンをどんどん出すように指令がいきます。そして、脳がストレスホルモンにさらされて色々な問題が起こってくるのが分かっています。

た。

そこで、私はハーバード大学の精神科医のタイチャー先生に会いました。私は3年間ボストンで留学していました。ここのステージ（2015年福岡女学院大学大学院発達教育学専攻開設記念国際講演会）にも立たれたタイチャー先生です。患者さんではない一般の人、「患者さん」と言うと、うつ病やPTSDの患者さんを集めた方が容易に研究は進みます。しかし、あえて患者さんではない一般の人を1500名近くからその子どもの頃の思い出、辛い思い出、楽しい思い出、興奮するような思い出、悲喜交々の思い出、その中で受けたくなかったけれど受けてしまった虐待、色々なタイプをそれぞれ一種類ずつ集めたのです。驚くことにこの色々な脳の部位では、それぞれのタイプによってその受けた虐待、マルトリートメントの種類によって変化がありました。まず、これを詳しくお話しさせていただきます。

まず、言葉による虐待です。電通で過労死した女性は、上司から暴言を受けていました。受けてはいけない、あつてはいけない言葉の暴力です。言葉の暴力というのは、身体に傷ややけどの跡はありません。しかし、相当心に影響を及ぼすことがこれまで分かっています。そして、脳にいかなる影響を及ぼすのか、1000人近くを調べました。4、5年かかる大変なプロジェクトをタイチャー先生と行いました。叱りつけ、囃し立て、侮辱、非難、脅し、恐怖を与える、卑しめる、あざ笑う、火傷など、どの1つをとっても受けてはいけない、そしてなげかけてはいけない言葉の暴力です。家庭ではおろか、学校や社会の中、職場でもそうです。私は、暴言虐待だけを受けた子どもさんをたくさん見てまいりました。今も見ています。中にはゴミ扱ひされる子もいます。「ゴミ」と呼ばれます。可愛い名前があるにもかかわらず「ゴミ」と呼ばれます。「おまえは産まれてこなければよかった」、「死んだほうがまだ」とずっと言われています。そのような子どもたちが少なからず日本にもいます。

（スライド）

MRIを回します。これは、音や聞こえ、会話、コミュニケーションに関わるとても大事な領域、聴覚野です。この聴覚野は聴力に関わります。そこが肥大していました。肥大ということは、変形していたということです。普通は、ある時期、思春期前後からどんどん刈り込み、盆栽で言えば剪定のようなことが起こり、効率性が良くなります。しかし、まるで雑木林や雑草が生い茂った藪の中のようにになると、小さな大事な音が入りにくくなるのです。

対人関係、人と人との関係、それから難聴にもなります。場合によっては言葉を失うこともあります。そういった問題が出てきます。言葉は本当に身体に傷ができません。しかし、甚大な影響が心だけではなく脳にも起こります。それを、近所で暴言を普通に平気でやっているお父さん、お母さんいらっしゃいます。その時に、勇

気をもって語り部になっていただきたいです。「言葉の暴力は子どもの脳に良くないですよ」と言うことです。是非、伝えていただきたいエビデンスです。

それから体罰です。これも、色々な体罰の問題がスポーツ界で出てきています。体罰はやはりご家庭でも良くありません。学校でもそうですが良くありません。しかし、親御さんは一生懸命よかれと思い、しつけとっています。空回りしているというしか言えないような状況です。それは、その親御さんが、小さい時におじいちゃん、おばあちゃん世代から体罰を受けて育っているからです。親からの体罰を受けて成長してきているので、我が子にも子育てで、しつけということで体罰をしてしまいます。では、体罰はどういった影響が問題なのか見てみましょう。

去年の5月に厚生労働省がキャンペーンをいたしました。「体罰は百害あって一利なし」です。普通は「喫煙は百害あって一利なし」ですが、体罰は百です。これはのべ111件の調査研究をすべて一緒にして、16万人もの子どものデータを分析し直しました。親による体罰の影響は、この直線から左側が望ましい影響、赤いところ、この右側のグラフが望ましくない影響になります。全く望ましい影響がないと分かりました。ネガティブな親子関係や精神的な問題、反社会的な行動、強い攻撃性、特に子ども時代に出てくるのはこの精神的な問題が反社会性、強い攻撃性です。全くその望ましい影響は、子どもが痛い思いをして結果的にその行動の修正、変容に役に立っていないということが分かりました。

(スライド)

これはタイチャーラボで、私が解析した研究結果です。前頭前野の中でも特に感情、気分そして犯罪抑制欲に関わっている領域が小さくなっていました。想定外で驚きましたが、ここが阻害されると、うつ病も一緒になります。それから素行障害といって、薬物に手を出したり非行に走ったり犯罪に手を染めていきます。言うならば警察の世話になります。どんどんこの世の中から犯罪が増えていきます。こういったところに関わることが、長年激しい厳しい体罰を受けてきたことになります。強い体罰は子どもの脳に大きく影響すると分かってきました。

そして、海外では「ノースパンクチャレンジ」が言われています。スパンクとは「スパンキング：お尻をたたく」です。子育ての1つをとって、日本社会では古くからずっと取り上げられたしつけです。これがノースパンクの「お尻を叩かないでも子育てするように」というキャンペーンが、どんどん欧米で体罰の是非論から発展しています。

ようやく愛の鞭ゼロ作戦が去年の5月に出ました。体罰ゼロの育児推進に厚労省がやっと乗り出しました。子どもへの体罰は世界50か国以上が、法律で全面的に禁止されました。しかし、日本は体罰の認識がまだまだ甘く、成人男女の6割以上がまだ体罰に容認するという結果

が出ています。なぜかという、法整備ができていないからです。これを置き換えますと、今レストランでたばこを吸う人はどんどん減っています。それは、法整備になって犯罪者として罰せられるからであり、法律の法案ができたということは、たばこを公共の場で吸ってはいけないことです。当然、飛行機やJRもそうですが、法整備が進むと、世界50か国以上の法律で体罰が禁止されているところは、見事に虐待が減ってきています。ですから、この体罰に関するこのキャンペーンはとても意義があります。

健やか親子21のホームページからリーフレットが出来上がりました。これはみなさま、どの方も無料でダウンロードできます。子育て支援の窓口、それから産婦人科医の窓口そして助産師さんが使っておられます。子育てサポートセンターでも無料で配られています。

ここに私の研究成果である、タイチャーラボでやった研究成果が出ています。「体罰は百害あって一利なし」。みなさまもこれをご活用なさってください。そして、近くで一生懸命、空回りをして子育てをしている方々にお声をかけてください。そして、もう1つ大事なことがあります。「夫婦喧嘩は犬も食わない」と言いますが、激しい両親の諍い、DV これを目撃させることはいわゆる心理的虐待の1つです。10年前以上に定義され、あとを絶ちません。今は警察からの通告が増えています。これが児童虐待、相談対応件数の増加に影響していると言われています。

私が、最近よく経験するのは母親がお父さんを殴る蹴るだけでなく、ひきずっていています。お風呂場で、お父さんが助けてくれと叫ぶ断末魔、髪の毛を引きちぎります。それを別の部屋の兄弟三人が、震えながら聞いています。もちろんそれは、児童相談所が介入して施設に分離しました。面前でいう言い方を私は好きではございませんが、子どもの直前の、目の前のだけがDVではありません。家庭という密室の中で、同じ部屋にいらなくても子どもは、その断末魔やその両親の諍いをずっと見聞きしています。それもDV目撃です。DV目撃というのは、ここに書いてありますように、トラウマ反応、心の傷の反応が生じやすいと言われています。そして、知能、語彙理解の低下です。もしかすると、FくんとMくんもそのようなことがあったのかもしれませんが。このような語彙理解力の低下を招くというのもありました。

DVの種類というのは暴力だけ、殴る蹴るの痣ができるだけではありません。ここはもう声を大にして申し上げたいです。内閣府の調査によると、4件に1件の割合でDVがあります。その中には、殴る蹴るだけではなく、言葉の暴力、大事なものを目の前で壊す、日常的な軽視、強力それから性的な強要、避妊の非協力、暴力後のセックス、それから支配行動です。それから、社会から孤立させる交友関係の遮断、情報や支援のアクセス

の制約、日常の行動監視、経済的なものもあります。DV家庭に育った子どもの健康は悲惨です。PTSD、うつ病、不安障害おろか攻撃的な行動、自殺寄与、念慮、そして、摂食障害である、拒食、過食、吐く、さらに、睡眠障害、夜眠れなくなるということがあります。認知や行動発達遅れの遅れなど、ありとあらゆる問題が後遺症として出てきます。

視覚野の容積現象があるということが分かってきました。これは「後頭葉」です。みなさんのこの後頭部に、大事な視覚的、記憶力に関わる、それから視覚的な感情の処理にも関わります。この大事な視覚野という部分の容積が小さくなると分かってきました。その前に、身体的なDV目撃、暴言DV目撃、両親が激しく取っ組み合いの喧嘩をするなど、どちらが影響あるかという研究もしてきました。

暴言DVは、6倍以上悪い影響があります。身体的な暴力よりも怒声や罵声、暴言の方がより子どもの脳に深刻な影響を与えます。つまり、DV、日本語で家庭内暴力と言います。ドメスティックバイオレンスを身体的なDVに限定する理解は、心や脳にある甚大な影響を伺うと被害を見えなくしています。つまり、身体に傷があるとDV、身体に傷がないとDVではないかということ、そういうことではありません。6倍も影響があります。しかも、親の学歴や両親からの暴言よりも、貧困の影響もこれだけ影響があるということが分かってきました。これも脳科学の大事なエビデンスだと私は自負しています。

先程も内田先生が詳しくおっしゃった、「脳梁」です。これは、「脳（のう）」の「梁（はり）」と言います。右脳と左脳をつなぐ感情の統合にとっても大事な役割があります。もちろん正常で女性が大きいです。その脳梁の容積が、ネグレクトを受けると健常児よりも小さくなります。

これは赤毛ザルでも同じです。赤毛ザルで悲惨な実験が行われました。サーチェスという女性の研究者が、赤ちゃんザルを大人の親ザルから引き離し、ネグレクト状態にし、後での成長が小さくなっているということを証明したのです。しかも、集団行動に適応できなくなります。だから子どもなサルなのです。そして様々な人間関係、サル関係も悪くなり、喧嘩っ早く、攻撃性があります。ですから、人間も同じように、タブレットやスマホばかりの、ながら育児と言いますか、赤ちゃんの時、授乳中からずっとお母さんがタブレットや携帯を扱っていると、子どもと目と目で触れ合うなどのコミュニケーションが取れなくなってしまいます。スキンシップがなく、ネグレクトがひどくなると、脳の問題が出てくるということが証明されました。

今日、私の研究成果を出しましたが、激しい体罰や暴言、親のDVを見聞きすることで脳が変化しなくなっても、変容していくということが分かってきたのです。これは大変なことです。これがどうやって回復するか、後半でお話し致します。

私は、「子育て困難により傷つく脳」というようにしました。虐待により傷つく脳では、親を犯罪者扱いで終わりで済まない時代になったからです。マルトリートメントは「子育て困難」。後で詳しく申しますが、「寄り添う」。マルトリートメントを繰り返す親も、「褒め育て」をしないとはいけません。なぜなら、親が小さい時に褒め育てられていないからです。子どもを「褒め育て」しないとはいけませんが、そのようなマルトリートメントを繰り返す親にも、責める対応ではなくて寄り添う対応をしていただきたいです。

(スライド)

なぜかということ、分かりやすくイラストにしました。トラウマのメカニズム、心の傷です。左側が皆さんがお持ちの普通の記憶です。悲喜交々のまま小さい時の記憶があると思います。これらは（記憶の）引出しにしっかり整理整頓されてしまわれています。振り返ることはないですが、小さい時に、虐待・ネグレクトを含むマルトリートメントを受けるような子は、怒り、恐れ、ドキドキ、孤独感が溢れ返っています。溢れ返って蓋ができないのです。しかも、このトラウマ記憶というのは、些細な刺激でファーッと爆発してしまうということが分かってきました。どういうことかと言いますと、その恐ろしい記憶が、瞬間冷凍するのです。瞬間冷凍ということは、何かのきっかけ、些細な刺激です。

例えば、私が相談にのっていた性虐待（性的虐待）をずっと受けていた女性は、母親の新しい旦那さんからずっと被害を受け、その旦那さんの体臭に近い人の匂いがすると、感情が溢れだすのです。また、暴言虐待を受けてきた子どもさんは、成長につれて元気になるのですが、やはり大人の男の人の怒鳴り声が出たらパニックになって暴れ、急にスイッチが入ったように暴れ出します。このように自分は愛されていない、死ぬかもしれないと恐い思いをし、これが未整理のまま、トラウマ体験を思い出すような刺激があると爆発してしまうのです。

(スライド)

それをタイチャー先生は脳科学してくれたのです。これは2年前の講演会（2015年福岡女学院大学大学院発達教育学専攻開設記念国際講演会）でも出されたと思いますが、これは右側が虐待経験者。身体感覚を思い出す、冷たい、痛い、寒い、こういった感覚を受ける「楔前部」と言います。ここが楔前部という緑のネットワーク、中継地点です。ここから様々な回路が入って、この身体感覚の想起をします。これはネットワークが少ない方がいいのです。生きづらさにつながらないからです。左側は、健康な人、本当にすっきりしているのです。こんなにも違いがあるのです。

もう一つおまけ。痛み、不快、恐怖にあたる前頭部、この緑の中継地点、ここからのネットワークがすっきりしているかどうかです。右側は、渋滞でぎゅうぎゅう詰りです。ちょっとした刺激でパーンと出てくるのです。

そこで回復、やはりアタッチメントです。アタッチメントがその解決、回復のアプローチの大事なキーワードと思ってください。なぜかという、内田先生がお話しされ、証明されたように、愛着の再形成が可能だからです。アタッチメントは色々な意味で子どもの育ち、この指標になります。目と目で見つめ合う、それから手と手で触れ合う。3つ目は何でしょう。愛着に大事なものは、微笑みです。それから笑いかける、語りかける、ハグです。母親だけではありません。父親、それから養育者、いわゆる祖父母、それから乳児院の先生でもいいです。保育園の先生、場合によっては学校の先生や養護の先生、色々な方との間に愛着の再形成がもちろん可能です。ですから、誤解をしないでいただきたいのは母親だけではないということです。

この安定した愛着が形成されると、親や養育者は、いくなれば子どもにとって港になります。そうすると港から小さな船がいつか外の海に向かって出港していかないといけません。それが社会性に対する育ちです。社会性の発達。その時その外の海は、嵐に遭うかもしれない。場合によってはその小さな船ですから、エンジントラブルになるかもしれない。その時に、安定した安全基地の港が機能してれば、子どもはその怒りや衝動性をちゃんと自分で沈めて、また航海に行くのです。ですから、この親、養育者、安定したその安全な基地は、まさかの避難場所にもなるわけです。それが不安定であると、子どもは社会性の発達に支障をきたしてしまいます。不適切な養育、いくなればマルトリートメントを引き起こすのが愛着障害です。

家庭で日常的に怒鳴られたり、ネグレクトを受ける。親が気分で、スマホをしていない時にだけ声をかける。そのような、ながら育児をしますと分離不安になります。親が出かける時に後追いもしない、泣きもしない、そして再会場面でもキョトンとしている。場合によっては寄って行かない。そういった不安定な愛着が形成されます。広くとって3歳以前と言われるかもしれませんが、私は5歳以前でも養育者との情な関係が大切であると思っています。怒りや衝動性のコントロール障害が出ると、それが、子どもの育ちに多大な影響を与えるわけです。

そして、今、発達障害、神経発達症、発達障害のバブルと言われています。何か子どもの問題行動があるとすべて、学校の先生や保育園の先生は発達障害という診断をしたがるのですが、似て非なるものが出ています。これが愛着障害のコアです。

実は、アタッチメント障害、愛着障害はスペクトラムです。自閉スペクトラム症などがあります。アタッチメント、愛着の適応レベルがあるのです。適応的か不適応か、連続しているということをもう既にジーナやヴォーリス先生たちが言っているのです。安定型、不安定型そして、おごなり型、未解決、回避。この辺りまではいい

けれど、安全基地のゆがみがあると愛着障害となります。そして、最重症系がアメリカの精神学会の診断基準の、反応性愛着障害、脱抑制対人後遺症。こうなると大変です。里親さんも子育てに苦労されます。施設に入られた子どもさんも色々なお子さんが、私の診療に紹介されて来ます。この辺りが愛着障害です。程度の差があるので、一側単にこれということとは言えず、レベルが色々あるということです。

典型的な症状をお示しいたします。内向きな場合は他人に対して無関心、用心深いと言います。これは先程もありました、FとMのところ。イライラしやすい、集中力、学習の意欲がない、多動、落ち着きがなく友だちとのトラブルが多く、喧嘩が絶えません。そして、これも特徴ですが、初対面でも人見知りや全くなく、すりすりすり寄ってきます。とても馴れ馴れしいのです。これは人と人との距離感が保てず、遠慮ありません。これが非常に特徴的な愛着障害の症状でございます。

「この子は視線が合わない」、「自閉症じゃないか」と10人中10人の医療者が診断してまわってきた、9か月の赤ちゃんの貴重なケースです。「アイコンタクトがない、おもちゃを振りかざしても目が合わない、それから、名前を呼んでも振り向かない、お座りが出来ていたのにできなくなった。」つまり、退行現象が出ていました。民生委員や小児科医、看護師、それから児童相談所のスタッフ、児童員、保健師は色々な事例検討をしました。すると実は、おばあちゃんからの暴言虐待を受けていたのです。体の傷はありませんでした。9か月のこの赤ちゃんをおばあちゃんから引き離したのです。

(映像視聴)

そうすると、おばあちゃんから引き離して、わずか3週間で視線が合うようになり、笑顔が似合う赤ちゃんになったのです。そして、これは発達障害の一つである自閉スペクトラム症とは違うなと思いましたが、私に教科書的なインパクトを与えたケースです。

愛着障害というのは、非常に奥が深いのです。しかし、だから愛着が大事なのです。実は、愛着障害の有病率は子どもの2%と言われています。社会的養護を受ける子どもの4割です。これはすごいことです。施設養護、それから里親。今、厚労省が去年から里親養護に7年後に70%まで引き上げる数値目標を打ち出しました。このような中で見ていかないといけないのです。

そこでご褒美を感じる脳の働きを調べることにしました。その研究の動機づけは、愛着障害を持つ子どもというのは、怒られてもフリーズしますが、褒められても固まる姿があったからです。褒められて響かないのは何故だろうとずっと思い、脳研究をすることになったのです。

目標に向けて私たちを動かすエンジンがドーパミンと言います。神経伝達物質です。これは皆様、プレゼントをもらったり、家族から褒められたり、それから、社会では、部下が上司から褒められたりすると、その部下

もまた明日からの頑張るぞと思います。また、勉強するぞと目標に向かって私たちを動かすエンジンである神経伝達物質が出ます。これは、達成感にも関わります。やる気の源はドーパミンです。これがどのような働きなのか。お子さんにMRIに入って頂き、寝ずに、お小遣いをチャリンチャリンとあげるようなカードゲームで、当たれば60円、当たらない時は0円という研究をしました。

これは福井大学で、これだけの論文をおかげさまで出させていただきました。今日は最新の論文の結果をご紹介しますと思います。

一つは、ご褒美であるお金をあげた時の脳科学。左側が健康な定型発達のお子さん。右側は、愛着障害を持つお子さん。どこが違うか、もう見て分かるでしょう。

前兆体といって、お金をもらった時に、ヤッターと思ってドーパミンが出ます。この働きが落ちてくるとなると、私は愕然としたのです。「この子たちはお小遣いが響かないんだ」と。

それから、トークンエコノミーといって、私たちが喜んでスーパーやドラッグストアでポイントやシールをためるでしょう。響かないと分かってちょっと愕然としたのですが、喜び・ご褒美の脳活動が弱いということがよりよく分かりました。しかし、みなさんここでめげないでください。脳科学が物語っているのは、「この子どもたちを普通の子ども以上に、褒め育てを下さい」ということです。

一筋縄ではいきません。根気よく根気良く、気長に気長に話を聞いてあげたり、認めてあげたり、出来高評価をし、そうすることによってドーパミンが出るようになるのです。

それから感受性期、これは臨界期です。どのような時期に一番、虐待、ネグレクト、マルトリートメントを受けやすいのか。これはタイチャー先生も研究しておられます。ご褒美が感じられない脳になるということは、イコール、薬物汚染に入っていきます。これはどんな時期に一番こういう脳になってしまうのか。お腹にいる時か、赤ちゃんの時か、幼児か、思春期かと思いを検討したのです。そうしましたら、驚くなかれ、生後1歳です。この時期に、虐待、ネグレクトを受けると、最もそのご褒美の脳活動が低下するような脳が作られていくということが分かってきたのです。

そうすると、お腹の中にいる時は問題ないと思うでしょう。違うのです。やはり母体が偉いというのは、お腹の中にいる時は胎盤が、お母さんのストレスホルモンをブロックしてくれます。本来はもっと高いはずですが。しかし、お母さんがDVストレスなどを受けても、赤ちゃんにそのストレスが行かないように胎盤がブロックしてくれています。すごい摂理だなと思いました。だからといって、0歳や妊娠中は「大丈夫だよ」「放って置いていい」ということではありません。そこはお間違いなく。ただ、1歳頃の早い時期に、待たないということ

す。

それから視覚野の特定部位が小さい、しかも、視覚野の容積が小さい人ほど問題行動が大きいということも証明致しました。

そして、今年新しく出たこの視覚野の容積に影響する愛着障害のお子さんたちの視覚野、感受性期というのを調べましたら、生後4歳から7歳、この時期も影響を及ぼしています。特に5、6歳、この時期に一番、愛着障害のお子さんが虐待を受けていたら、この視覚野に問題が出てくるのです。どういう問題が出てくるかは、後でご紹介いたします。

虐待の種類が重複していたり、やはりネグレクトです。ネグレクトによってこの視覚野の問題が一番大きく出てきます。これは、今年になって正式に報告致しました。

もう一つおまけ。これは驚く内容です。視覚野に関する感受性期のように、不安やPTSD回路があり、扁桃体や海馬のような辺縁系の機能異常起これると、この視覚野の感受性期、特に視覚野の容積に関連しているということが分かったのです。

（脳のCG画像）

これが扁桃体でアーモンドのような形をしています。そしてここが視覚野です。ここが非常につながっています。扁桃体は怒りや不安であり、これが、見事に記憶力や学習能力に結び付いているのです。こんなに近い位置にあるのです。ですから、視覚的な感情処理、こういったところにも影響が出てくるのです。これが愛着障害です。対人関係などの問題、場合によっては解離、様々な症状に出ます。そして怒りや不安、こういった視覚野の容積にまで影響を及ぼすということが分かってきました。

治らない傷へのアプローチ、ここからが大事です。内田先生もおっしゃっていた、レジリエンスです。発達の特性や愛着、トラウマ、これこそ心の傷が回復することが大事です。治る傷であるということも徐々に証明されていきました。

2008年に最初に出たのですが、その後、海馬の蒲柳をあげる、前頭葉の機能が上がる、扁桃体の暴走が起きるということが出されました。それから私たちの福井大学初で、逆境と意見からの心的外傷の成長、これにどれが関わっているか、みなさん知りたいでしょう。なぜなら、これは予防に繋がるからです。実行機能やワーキングメモリに関わっている領域、これは脳の前頭前野の一部ですが、個々の働きが良いということは脳の回復が早いということが分かってきたのです。つまり、この辺を刺激するのです。

ジグソーパズル、それから認知行動療法もそうですし、マインドフルネス、瞑想、ヨガです。それから運動、特に体操、日々のいわゆる体操が良いです。NHK体操、ラジオ体操があります。そのような体操で前頭葉機能を上げることによって、心的外傷の成長がうまくいくということが分かってきました。

頭を働かすことによって、脳のとある部分の回復が早くなるのです。それから愛着障害の脳活知の変化が起こります。これは線条体の機能が落ち、ドーパミンの出が悪くなっているといいましたが、ちゃんと回復していくのです。

私が非常に丁寧に見ていた子どもで嬉しかったケースがあります。それは、「お父さんにありがとう」と言ったのです。私の外来に来るまでは、お父さんに刃物、特に包丁を持ち出して脅していた子が、元気になったのです。その子は、線条体から全くドーパミンが出てなかったのです。そして、わずか7か月で出てくるようになったのです。

このように、子どもの心は、癒されたら回復するのです。それを強くメッセージとして出したいのです。小人症の子どもも、身長が伸びるのです。ちゃんと環境を整えると、身長や体重が伸びます。

それから、安心して生活できる場の確保です。愛着の再形成、この援助がとても大事だということをぜひ分かっていたいただきたいのです。そして、生活支援や学習支援、特に学習支援は、出来高評価をしてください。子どものたちが伸びます。他の子と比べる必要はございません。その子の認知機能を少しずつ上げていく、気長な支援をしてください。そして、フラッシュバックや回復に対する治療、これは専門的な治療が必要です。

今は親子対象のケア、PCIT、AF - CBTそれから先程のように、箱庭を使った個人対象のものもありますが、親子関係の対象の心理治療が、これからとてもキーワードになります。箱庭は私どももやってます。プレイセラピーもやってます。トラウママクロ療法は小さい子どもには中々難しいです。

虐待介入、マルトリートメントと申しますが、介入に際して必要なのは、発達の視点です。子どもに対してのアプローチだけでは厳しいのです。親に代わる養育者と子ども、この子どもにとって養育者の存在が絶対的に必要になるのです。親と子の関係性の病理がマルトリートメントです。ですから、子どもだけを元気にするのではなく、親との関わり、関係性を通して再形成させるのです。

先程のFくんとMくんも保育士との関係性ができて、アタッチメントの再形成ができるのです。発達の視点でとても大事なものは、この養育者、これが必要になるということが分かったのです。

トラウマ焦点化認知行動療法：TF-CBTもどんどん盛んになってますが、まだ限られた施設でしかできません。なぜかという、アメリカのトレーナーが受ける専門家しかできないからです。

マインドフルネスは良いです。ストレス軽減にもなりますし、どこでもできます。自分が呼吸にフォーカスして内面を見つめるという作業です。禅、瞑想です。ヨガでもできます。

私はこのような感じで見守っています。10年以上で付

き合いの長い愛着障害の子どもさんは、トラブルが起こります。もう10回以上学校のガラス窓を破ってきたと思います。でもトラブル時は静かな部屋に移す、それから頭ごなしに怒らないでとしています。そして、キーパーソンは心理士、情報の臨床心理士さんです。情報の循環を見出す、このわれ囲むというスタンスです。これがとても大事です。

そして皆さんができることは、「おせっかい（お節介）」です。これは東京都の虐待防止啓発のゆるキャラです。おせっかいの“かい”は「貝」だそうです。このように「おせっかい」としている人たちが必要なのです。

これくらいがいいのです。今の世の中、みんなが子育て困難な家庭に寄り添ったり、その親の話を聞いてあげたりするのです。責める対応ではなく、寄り添う対応、そして、子どもを見守ってあげます。場合によっては子どもを褒めてあげるのです。さらに、そのような家庭の情報を他機関につないでいきます。このようなおせっかいを焼くことは一人ではありません。みんなでおせっかいを焼かないといけないのです。そのような時代に入っていることを知っていただきたいです。

これは、ヘックマンらシカゴ大の教授が、社会的奉仕の費用対効果を出しました。これはあまりにも有名です。そして、ノーベル経済学賞を取りました。就労支援や学校教育にも早い時に投資し、この時期にマルトリートメント対策をしていただきたいのです。

それは啓発です。このように講演会で皆さんが知った知識をみんなにばら蒔くしかありません。そして虐待は早めに相談に行くのです。これはモデル事業になっていますが、もっと全国の自治体に広がり、更に10代で臨まない妊娠をして出産するなど、このような児童福祉、相談役、これが必要ではないでしょうか。これも「おせっかい」です。私は声を大にして言いたいのです。「親が子どもをマルトリートメントする社会のシステムを変えないと、この世の中は終わっちゃいます」と。本当に次の世代は大変な時代になります。2030年には日本の労働人口は1000万人減るのです。経済力も落ちていきます。どんなにみんなが頑張っても、もう次の世代は大変です。そこを知っていただきたいです。

私は、虐待を防ぐ方法だけではなく、子育て困難に対する対策の研究を社会技術研究開発センター、リスパックスの研究を、分野を超えた仲間としています。法律や警察や学校教育、色々な人と手を取り合い、無い知恵を出し合って、地域社会と一緒に研究をしています。なぜかという、この頂点の方で養育失調や養育困難ではなく、母子保健、ここがやはり大事であると思っています。予防も出来ることが大事です。

そこで私たちの新しい研究成果が出ました。普通の親、お母さんも子育てをしていると心が折れるのです。気分が落ち込むのです。これはうつ病などと違って、早い時期に脳の働き、共感性、感情を読み取る脳の働きが

落ちることに気付いて周りのみんながおせっかいを焼く。これをしないといけないということです。

初めてこれを今年の2月5日に文科省でプレスリリース致しました。これは早い時期にお気づきになって、みんながおせっかいを焼けるのではないかと、大変良い成果だと自負致しております。心の働きというのは、普通の親でも落ちるのです。今、お母さん7人中1人が臨床行きの抑うつです。こうなったら大変です。子育てが中々できなくなってしまうからです。でも予備軍もあります。それを何とか早い時期に気付こうと思っています。

(スライド)

これは厚労省の委託で、統計が出ています。青が2002年、グレーが2014年です。たったの12年間でこんなに減っているのです。何が減っているかということ、子どもの子育ての悩みを相談できる人です。いわゆる近くに「おせっかい」がいなくなっているのです。そして、子どもを預けられる人もそうであり、これも「おせっかい」です。そして、子どもを叱ってくれる人も減っています。それは、半分以下なのです。これも「おせっかい」が減っているということです。少子化、家族や地域の繋がりの希薄化など、養育環境が変化する中で、子育てが孤立化して、「孤育て」になっているのです。これを何とかしないとイケません。子育てが孤立化していることは、社会的な孤立であり、家族が孤立してしまったら良くありません。そのために、やはり「褒め育て」をしていかないとイケないのです。

アロペアレンティング、共同体の子育てが必要な今の時代、実の親だけではなくて、社会で子どもを育てないといけないのです。

そこで厚かましく命名致しました。「とも育児」。家族の脇にいて、共に「寄り添う」です。「とも育児」、これが大事ではないかと思っています。これからも、啓発に努めていこうと思っています。

これは図書館で借りてください。TEDx 無料でダウンロードできます。無料でダウンロード、動画ですので無料でご覧いただけます。アタッチメントです。日本語で今日のおさらいが13分で出来ます。恥を忍んで TEDx にも登壇致しました。

「サイエンス」は、世の中のものの見方を変えると私は思っています。NASA の宇宙飛行士が地球の外に飛び出して、初めて地球を、人類にとって掛け替えのないオアシスだと気付いたのです。これがサイエンスです。私たちの生き方、人生、それから社会そして未来。忘れてならないのが、次の世代を担う子どもたち。彼らの幸せもサイエンスです。この「サイエンス」は、ものの見方を変えてくれると思っています。

ご清聴ありがとうございました。

